

國學院大學學術情報リポジトリ

縄文時代後期・晩期の角底形土器： 集成事例と國學院大學博物館所蔵資料の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 蒼 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001925

縄文時代後期・晩期の角底形土器

— 集成事例と國學院大學博物館所蔵資料の検討 —

石川 蒼

1. はじめに

縄文時代後期以降、角底形土器と呼称される底部が方形の土器群が出現する。角底形土器については、阿部芳郎氏の研究（阿部2004・2007）によって、分類と編年や他容器との関係の理解が示された。しかし阿部氏による集成は、関東地方の事例に限定されており、実際は東北地方～甲信越地方にかけて分布する角底形土器の時間経過に伴う地域的展開の様相がやや不鮮明であった。したがって、阿部氏が関東地方を中心とする加曽利B式から安行式の分布圏に重なりと想定した土器型式圏との関係にも、検討の余地が残されている。また、國學院大學博物館収蔵資料には、阿部氏の分類・編年案に、追加されるであろうバリエーションが幾つか認められる。よって本稿では、後期から晩期における角底形土器の展開過程を、整理と検討を通じて、詳細を把握することを主眼に据える。

そこで、まずは角底形土器の全体像を把握するために、関東・甲信越地方における後期前葉～晩期中葉^{注1)}の事例を集成し、それらの年代的・地域的様相を把握する。東北地方にも角底形土器は認められるが、I期より継続してみられるものではないため、ここでは参考に留める。その上で、当館所蔵資料の観察を行い、編年的位置付けや地域的特徴の抽出を試みる。

2. 各期の動向

(1) 角底形土器の出現・盛行・終焉

集成作業では、関東・甲信越地方を対象とした。内訳は、茨城県5遺跡12例、栃木県2遺跡10例、千葉県24遺跡86例、埼玉県18遺跡83例、東京都3遺跡6例、神奈川県2遺跡4例、群馬県2遺跡4例、山梨県1遺跡1例、長野県1遺跡2例、新潟県1遺跡1例である。詳細は【表1】に示した。

I期（堀之内式～加曽利B3式期） 最古例は堀之内式から加曽利B1式に埼玉県の大宮台地・千葉県の下総台地に出現する。当期は、多様な器種の底部形態に、方形のものが認められる^{注2) 注3)}。その中で四隅に粘土粒を貼り付ける埼玉県雅楽谷遺跡例【図1-1】、袋状の張り出しを有する八木原遺跡例【図1-2】、そして器壁が厚く縦位文様によって四分分割する胴部文様がみられない千葉県吉見台遺跡例【図1-3】の3例は古相を示す典型的な事例と捉えられる。

ちなみに青森平野の十腰内I式にも、方形の底部を有する資料が認められる【図1-6】。青森県以南

～関東地方北部に分布域の空白が認められるが、十腰内Ⅰ式の切断壺は、大宮台地上の黒谷田端前遺跡でも報告されており（埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012）、当期の北日本地域と関東地方東部との関係の言及には、今後の研究の蓄積を待たなければならない。

Ⅱ期（曾谷～安行Ⅲb式期） Ⅱ期には事例数の増加が顕著に認められる。分布範囲は、依然として大宮・下総台地に集中するが、晩期の安行Ⅲa～Ⅲb式期には、関東地方西部・甲信越地方にまで広がる。

安行Ⅲa・Ⅲb式には緩く外反しながら立ち上がり、縦位に区画された内部の文様が複段化する一群【図1-7～10】が顕著に表れる（阿部 2004）。中には、器形が扁平な一群【図1-13・14】も存在する。

関東地方西部・甲信越地方の事例は、大宮・下総台地との地域差が際立つ。神奈川県杉田遺跡例【図1-19】・山梨県金生遺跡例【図1-20】の底面中央には、埼玉県後谷遺跡出土資料以外に類例がない入組み文・渦巻き文が中央に施文される。金生遺跡の上部器形は、坏形になると推定される。しかし、新潟県朝日遺跡例は千葉県余山貝塚例と、口縁が方形を呈し、かつ文様構成が類似する。

一方で、当期に事例数が集中する関東東部にも、類例が限定的な事例が存在する【図1-15～18・22～24】。埼玉県宮合貝塚例【図1-22】・同久台遺跡例【図1-23】は、丸底で自立することができない。また、内湾しながら立ち上がる器形である。しかし、縦位文様によって四分割する胴部文様と、宮合貝塚例にみられる袈裟襷状の底面文様や内面ミガキは、角底形土器との共通が認められる。当期に製作が活発化する角底形土器の、模倣と考えられる。

Ⅲ期（安行Ⅲc～安行Ⅲd式期）

事例数が減少し、特に安行Ⅲd式の事例数は、極めて限定的になる。特徴的な形態は認められなくなるものの、北関東地方から中部高地まで広域に事例は散見される。

長野県円光房遺跡例は晩期安行式の三叉文が胴部にみられる。しかし、類似する器形は埼玉県後谷遺跡、同加納里遺跡出土資料^{注4)}に認められるのみである。

千葉県三輪野山貝塚例【図1-38】は、板状の生地から生成した痕跡を残す、SSC法（sequential slab construction）（可児 2005）による成形事例である^{注5)}。SSC法による他の類例は茨城県冬木B遺跡例【図1-32】と、十腰内Ⅰ式の北東北地域に知られている（青森市教育委員会 2003）。

なお、晩期以降は東北地方の大洞式の精製鉢類の底部形態に、方形の事例が広く認められるようになる^{注6)}。大洞Ⅱ式～Ⅰ式を主体とする岩手県九年橋遺跡の出土事例【図1-35～40】には、浅鉢形・壺形・注口土器等多様な器形にみられる。また、襷状・袈裟襷状の底部文様も共通する。

（2）角底形土器の展開

角底形土器は、Ⅰ期以来、大宮・下総台地の長期継続的な遺跡に集中する。また、形態的特徴と文様構成に共通性が看取される時期が、両台地上における安行Ⅲa・Ⅲb式に伺える。しかし、その継続時期は短く、安行Ⅲc式以前に概ね終焉を迎える。安行式期には、安行Ⅰ式から晩期安行Ⅲb式で姿を消すと考えられている関東地方の在地色が強い注口土器（石川 2015）など、晩期安行Ⅲb式を境に姿を消す器種が数多く認められる。角底形土器も安行式の性格が強い土器群に類するものと考えられる。また関東地方では安行Ⅲb式以降、土器型式上の細別化と小地域化（高橋2014）が知られており、角底形土



図1 角底土器の時期的展開

器の事例数が減少し、かつ共通性が失われていく傾向は、当期の社会変化に関係しているものと想定される。

大宮・下総台地以外の地域にみられる角底形土器は、安行 3 a・3 b 式期に至っても散見的であり、形態の変異が大きい。一方で、晩期以降の東北地方にみられる事例数の増加傾向からは、隣接型式との社会的関係が注目される。

3. 國學院大學博物館収蔵資料

前章の角底形土器の時間経過に伴う展開の把握をもって、國學院大學博物館収蔵資料の角底形土器 4 点の観察と編年的検討を試みる。

(1) 東京都大田区田園調布本町下沼部貝塚 B 地点出土

下沼部貝塚は多摩川東岸に面した、武蔵野台地上に立地し安行 3 a～3 d 式を主体とする貝塚である。

本例は、胴部外面に「下沼部 B」の注記が認められるものの、正確な収蔵の経緯は判然としない。他に本博物館が収蔵する下沼部貝塚資料には大場磐雄、徳富蘇峰コレクションも含まれる。

角端部 1 ヶ所が残存する底部～胴部下半部の資料である。残存高 6.0 cm、最大幅 13.9 cm、底部最大厚 4.1 cm、胴部最大厚 2.2 cm である。外反しつつ口縁部に向かって立ち上がり、胴上部は円形を呈すると推測される。角端部はナデによる成形のみで成形され、袋状に張り出す。

底部は約 4.5 cm の小粘土版に厚みのある大粘土版を押圧して成形する。底部成形の後、粘土帯を外周部に積み、薄く引き伸ばしているために胴部の断面構造は 2 つに分かれる。

胴部外面は、単節 LR を横位回転施文した後に幅約 4 mm の沈線を施文した後、沈線外部の縄文を磨り消す。角端部には幅約 5 mm の沈潜在縦位に沈線が施文される。

底面は無文で、平滑な表面である。しかし、隆起がほとんどなく整形の痕跡もないことから、製作工程のほとんどを台上に固定されていたものと想定する。なお、底面と胴部の境界にはナデが施される。底部内面は、中央に向かって粗いナデを施す。工具を用いた整形痕は認められない。外面も最終工程の成形はナデであるが、縄文施文部付近にヘラナデの痕跡がみられる。

剥落した粘土帯は、粘土帯毎に色調が異なり、焼きむらが激しい。特に底面から底部内面は黒色を呈する。また、全体的に風化が激しく、ひび割れも顕著である。

当例の胴上半部は、円形を呈すると推測されるため、千葉県吉見台遺跡例【図 2-1～3】に類似する、器壁の厚い I 期の様相を示すものと考えられる。

(2) 東京都大田区田園調布下沼部貝塚出土

本例は内面に「下沼部」の注記が認められるものの、正確な収蔵の経緯は判然としない。

角端部 2 ヶ所が残存する底部～胴部下半部の資料であり、残存高 4.3 cm、最大幅 10.4 cm、底部最大厚 20.2 cm・胴部最大厚 1.3 cm である。底面は、一方の角端部のみ 90 度を上回る。底面から 2.7 cm 上に、内湾から口縁部に向かって外反する変換点がある。角端部断面の立ち上がり角度は、他の部位と比較して直角に近い。口縁部付近は、円形を呈すると推測される。

底部は、環状の粘土帯の上から粘土版を押圧して成形する。底部成形の後、粘土帯を置き、底面中央

に向かってナデを施す。さらに粘土帯を積み、底部から3段目の粘土帯をやや外側に積んでいる。残存する部位は3段目までである。

底面中央には1超え1潜りの敷物圧痕がみられる。しかし底面外周部・底面と胴部の境界は、ナデによってすり消されている。角端部には、幅1.6cm程の粘土粒の貼り付けがみられ、底面に及んだ部分はナデによって突起状の高まりとなる。粘土粒は、幅0.7mm～1.0mm程度の先端の尖った工具で縦位にそれぞれ1条と2条施文される。下端部には剥落が顕著である。安行3a式以降、角端部に豚鼻状の粘土粒の貼り付けが行われるが、当例の刻みを有する粘土粒はその出現期に位置付けられよう。胴部には、0.7mm～1.0mm程度の先端の尖った工具で横位に施文される4条の沈線と、斜位に施文される沈線がみられる。反復して施文する痕跡はみられない。胴部外面は、横位方向のミガキが施される。底部内面は、円形を呈する。器壁の剥落は特に底面付近に顕著である。残存部位には丁寧なミガキの痕跡がみられ、黒色を呈する。

胴部外面の斜位に施文される沈線は、曾谷式に至り安定する横位に展開し斜位に施文された沈線（曾谷2008）と捉えられよう。また、沈線の施文に曲面をもった幅広の工具の側面が用いられる一方で、羽状沈線には細い棒状工具の先端による施文（曾谷2008）がみられることから、曾谷式に編年的位置付けを行う。

なお、本例は、安行3a式以降胴部文様にみられる縦位に区画する沈線文が認められない。このことから、Ⅰ期からⅡ期への過渡的様相を示す事例として捉えられる。また、角端部にみられる粘土粒の貼り付けは、埼玉県雅楽谷事例にみられるⅠ期の様相と共通する。

(3) 千葉県佐倉市江原新田曲輪ノ内貝塚（江原台遺跡）出土

本例は後期安行式に位置づけられる角底形土器であり、印旛沼沿岸の下総台地に立地する江原台遺跡出土資料として國學院大學博物館に収蔵されている。しかし、江原台遺跡は中期末葉から後期前葉に限定される遺跡である（佐倉市史編さん委員会2014）。従って本例は、同台地上に隣接する曲輪ノ内貝塚の出土資料と考えるのが妥当であろう。なお、曲輪ノ内貝塚は、本学史学会によって1946年に貝塚・包蔵地の発掘調査が行われている（佐倉市史編さん委員会2014）。

本例は、角端部1ヶ所が残存する底部～胴部下半部の資料である。残存高4.3cm、最大幅7.6cm、底部最大厚10.8cm・胴部最大厚1.0cmである。角端部は、約90°。角端部は、袋状に張り出す。底部は環状の粘土帯の上から粘土版を押圧して成形する。ナデによってすり消され、明瞭ではないが、角端部から1.6cm、外周部から0.4cm～0.5cmはヘラナデが施されず、小隆起を呈する。また、底面外周部にもナデが施され、角端部は上がり気味になる。

外面は、単節RLが横位に回転施文された後、幅1.5mm～2.0mmの二条一組の左右に分かれる沈線が施文される。2条の沈線の間隔は約2.5mm～4.0mmであり、ナデにより磨り消される。ナデは、角端部頂部にもみられ、平坦に作出されている。底部内面は、丁寧なミガキの痕跡がみられる。

本例の編年的な位置づけは、外面の縄文の輪郭が鮮明であることから、曾谷式の可能性も想定される。しかし、集成した曾谷式の資料の中には、底面外周部に刺突文等を施文する事例【図1-5】が見受けられたため、後期安行式に位置づける。

(4) 埼玉県深谷市針ヶ谷例（大里郡岡部村針谷出土）

埼玉県大里郡岡部村針ヶ谷は、利根川右岸の櫛引台地縁辺部に位置する。針ヶ谷周辺には、縄文時代後期（加曽利B式）～弥生時代前期（四十坂式）の遺物が出土している四十坂遺跡が所在する^{注7)}。

本例は、石膏による修復部内面に『埼玉県大里郡岡部村針ヶ谷』との注記がなされている。

角端部3ヶ所が残存する底部～胴部下半部の資料である。本博物館が収蔵する資料①では、唯一口縁部～底部まで残存する。器高4.5cm・最大幅15.6cm・底部最大厚0.8cm・胴部最大厚0.8cmである。角端部は、袋状に張り出し気味である。底面から2.0cmに、口縁部に向かって外反する変換点がある。上部は杯形であり、口唇部は先細る。口縁は、円形を呈する。

石膏による修復のため、現状では断面から成形法を観察することは出来ない。しかし、底面内面には直径4cm程の隆起が認められ、環状の粘土帯の中央に粘土板をはめ込む手法が用いられたと考えられる。底面内面は、円形を呈する。

底面中央には2超え2潜りの敷物圧痕がみられる。しかし、底面外周部・底面と胴部の境界は、幅1mm～1.5mmの二条一組の沈線と、その間に挟まれた連続刺突文によって区画される。胴部外面には、底面外周部・底面と、胴部の境界の区画と同様の施文手法によって弧状の文様構成がみられる。また胴部角端部には口縁部から底部に向かって縦位の文様構成がみられる。弧状の沈線には反復して施文した痕跡がみられる。口縁部付近には幅0.8mmの沈線が横位に施文されるが、ミガキ、ナデによって部分的に磨り消される。ミガキの単位はナデによって観察できない。

底面内面は、縦位にミガキが施される。底面内面から約2cm上までは、幅4mm～5mmの時計回り・横位のミガキが施される。しかし、外形の変換点付近で斜位にミガキの方向が変わる。

新屋雅明氏は、安行3c式を3段階に細別しており、口縁部文様帯の分離傾向を安行3c式中段階の指標とする（新屋1996）。本稿では新屋氏の見解に従い、本例を安行3c式中段階に編年的位置付けておく。

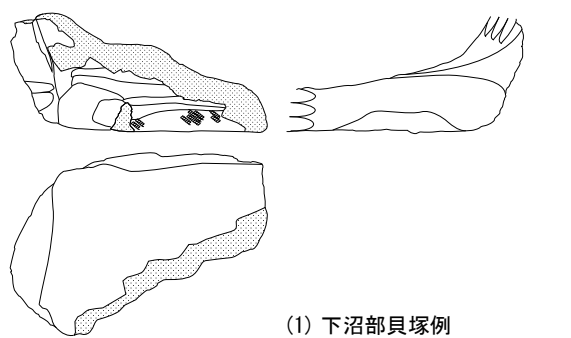
4. おわりに

本稿では、角底土器を取り上げ、関東地方においても大宮・下総台地上に地域性の認められる器種であることを明示した。また、本学博物館収蔵資料を用いて、先行研究では把握されなかった、I期の厚手の事例、古相とⅡ期以降の様相が一個体に認められる事例、曾谷式と区別して安行式に位置づけられる事例や、Ⅲ期の個体間の共通性が失われた事例を紹介した。以上の作業から、角底形土器の全体像を鮮明にすることに努めた。

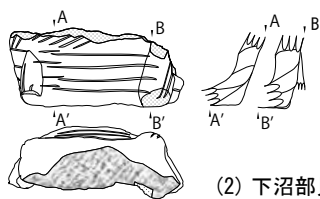
縄文時代後期・晩期、特に安行式における、鉢類の分類とその内容の記述については、遺跡個別の報告を除いてほとんど試みられていないのが実状である。本稿の研究成果が、今後の安行式における鉢類の基礎的な解釈に少しでも寄与する点があれば幸いである。

謝辞

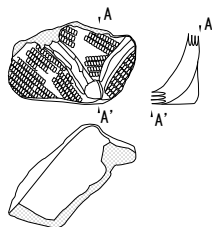
本稿の作成にあたり、川口市教育委員会的小林竜太氏、小坂延仁氏、黒済和彦氏には宮合貝塚例の実見に際して便宜を図って頂きました。【図2-22】は、その析に筆者が撮影した資料です。末筆ながら感謝申し上げます。



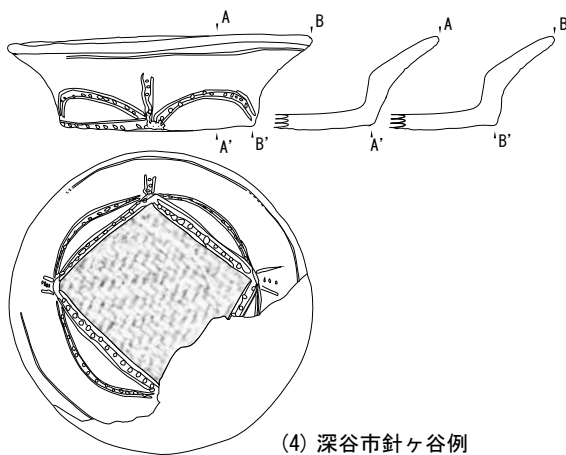
(1) 下沼部貝塚例



(2) 下沼部貝塚例

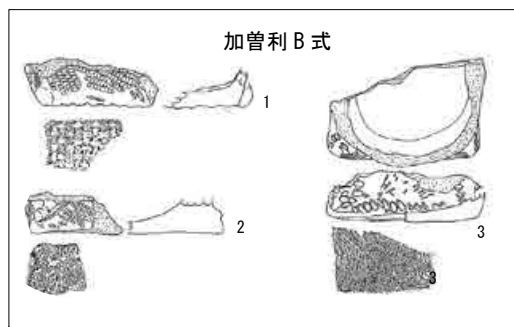


(3) 曲輪ノ内貝塚例

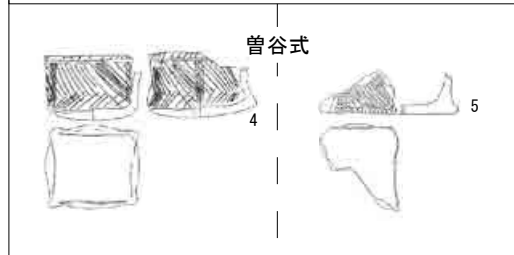


(4) 深谷市針ヶ谷例

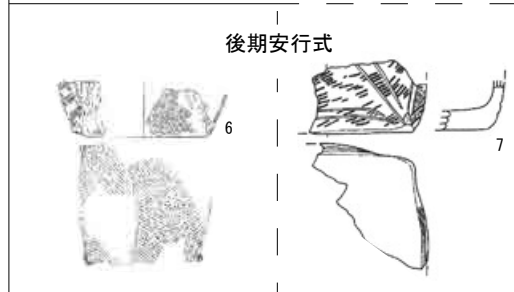
0 1:4 10cm



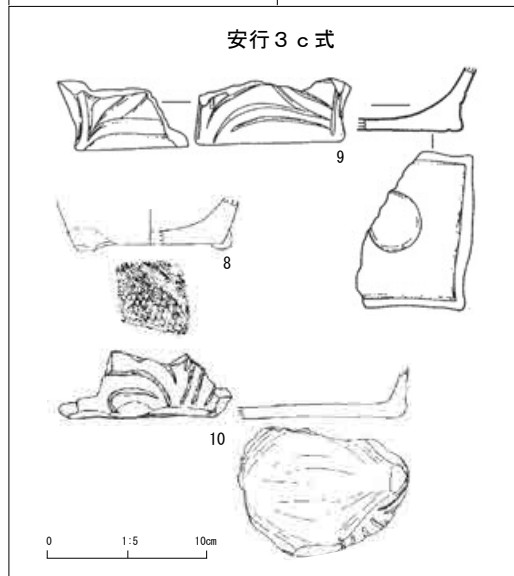
加曾利 B 式



曾谷式



後期安行式



安行 3 c 式

0 1:5 10cm

図2 國學院大學博物館所蔵資料 (左) と各期の事例 (右)

註

- 注1) 底部が方形を呈する土器群は、既に縄文時代草創期（室谷第一群土器）や中期船元式等に認められるが、非煮沸系鉢類への系譜は現状では見出せない。本報告では西南関東を中心に、小形土器の出現、土器副葬が盛行する、堀之内2式新段階から加曾利B1式期（中村 2008）以降の事例を集成の対象とした。
- 注2) 【図2-4】は注口土器であり、胴部文様にみられる集合細密沈線から、石神類型（秋田 1994・1996）と想定される。宝ヶ峯式の石神類型には、四隅に脚部を持つ事例が散見される。
- 注3) 【図2-5】は同遺跡から、胴部が円筒形と推測される口縁部付近の破片資料が報告されている。しかし他での類例は未確認である。
- 注4) 加納里遺跡（飯能市教育委員会 1991）の事例は、底部を欠損するため集成事例からは除外した。当例は、焼成時か使用時によるものかは不明であるが、口縁部内外面への炭化物が付着、胴部内外面の赤変が実測図に記載されている。円光房遺跡例の使用痕跡は不詳である。底部を欠損する無文の類例に後谷遺跡の事例がある。
- 注5) SSC 法は板状も粘土を貼り付け、繋ぎ合わせて成形する土器製作技法である。可見は SSC 法を用いるためには、硬質の素地もしくは、粘土を貼り付けるための型がなければ困難な成形方法であることを述べている。しかし群馬県千細谷戸遺跡、栃木県藤岡神社の出土資料には、籠等の型に粘土を貼り付けた、籠目土器が報告されている。三輪山貝塚例を、粘土を貼り付ける型を用いて成形されたものと推測される。
- 注6) 九年橋遺跡例と同じく脚部を持つ事例に、東北地方の三足土器がある。高橋龍三郎氏（1997）は列島内で中空の三足土器の自生論を疑問視している。最古例は大洞C1式とされているが、4例のみの事例であり、比較検討をするには現状では慎重にならざるをえない。
- 注7) 栗原文蔵は「四十坂遺跡の初期弥生土器」（栗原 1960）に、四十坂遺跡で採集した初期弥生土器を報告しており、本例はその際に収蔵されたものと推定する。

引用文献

- 青森市教育委員会 2003『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅶ』青森市埋蔵文化財調査報告書第70集
- 秋田かな子 1994「加曾利B1式注口土器の成立（予察）－王子ノ台遺跡出土の注口土器から－」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4 東海大学校地内遺跡調査団、150－165頁
- 秋田かな子 1999「注口土器の系統変化」『季刊考古学』69 雄山閣出版、76－80頁
- 阿部芳郎 2004「縄文時代後晩期における角底形土器の研究」『駿台史学』第121号、71－94頁
- 阿部芳郎 2007「角底形土器と籠目土器」『栃木県考古学会誌』第28集 栃木県考古学会、49－63頁
- 新屋雅明 1996「埼玉地方の安行3c式」『埼玉地域文化の研究 下津弘君・塚越哲也君 追悼論文集』下津弘君・塚越哲也君追悼論文集刊行委員会、233－253頁
- 大塚達郎「大洞式土器の受容と変容」『季刊考古学』第69号、70－75頁
- 可見通宏 2005『縄文土器の技法』同成社
- 菊池徹夫・岡内三真・大塚達郎 1997「青森県虚空蔵跡出土の共同研究」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第42号-4、81－103頁

- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2012『埋文さいたま』No. 55、9－9頁
- 栗原文蔵「四十坂遺跡の初期弥生」『上代文化』第30輯、23－26頁
- 佐倉市史編さん委員会編 2014『佐倉市史』考古編（資料編）
- 佐藤 拓也・馬場 羽瑠桂・石川 蒼・小林 美貴 2014「國學院大學所蔵 縄文時代後期の注口土器」『國學院大學
研究開発推進機構学術資料センター』30輯、89－102頁
- 菅谷通保 2008「曾谷式・後期安行式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、604－611頁
- 高橋龍三郎 2014「第6章 戸ノ内貝塚からみた縄文時後・晩期の集落と社会」『縄文時代後・晩期社会の研究：
千葉県印西市師戸戸ノ内貝塚発掘調査報告書』早稲田大学文学学術院考古学コース編、299－319頁
- 中村耕作 2008「縄文時代の土器副葬」『神奈川考古』第44号、29－70頁
- 飯能市遺跡調査会 1991『加納里遺跡第12次』飯能市遺跡調査報告4

國學院大學大学院文学研究科 博士課程前期

表1 関東・甲信越地方の角底形土器一覧

遺跡No.	市町村	遺跡名	時期	個数	図版No.
茨城県					
1	つくば市栄字毘沙門	上境旭台貝塚	安行3a～3b	3	
2	稲敷市福田	福田貝塚	加曽利B2	1	
			安行1～2	1	
			安行3b式並行	2	
3	猿島郡五霞町原宿台	冬木B貝塚	安行3c	2	第2図-29・32
4	古河市下辺見	思案橋遺跡	安行3b	1	
5	土浦市大字上高津字吉久	上高津貝塚	安行3b	2	
栃木県					
6	小山市大字梁	寺野東遺跡	曾谷～安行2	6	
			安行3a	1	
7	下都賀郡藤岡町藤岡	藤岡神社遺跡	曾谷	1	
			安行1～2	1	
			安行3b	1	
千葉県					
8	市川市堀之内	道免き谷津遺跡	安行2	1	
9	佐倉市江原新田	曲輪ノ内貝塚	安行1～2	1	
10	佐倉市生谷	吉見台遺跡	加曽利B	6	第2図-3、第1図1～3
			曾谷	3	
			前浦式	2	
11	佐倉市宮内字井戸作	宮内井戸作遺跡	加曽利B1	2	第2図-3・4
			加曽利B2	2	
			曾谷	1	
			安行1	1	
			安行2	3	第1図-7・8
			安行3b	2	
12	佐倉市ユーカーが丘	井野長割遺跡	安行3c	1	
			加曽利B～安行B	1	
			安行1～3b	1	
13	佐倉市錦木町	馬場遺跡第5地点遺跡	安行3a～3b	1	
			加曽利B3～曾谷	3	
14	佐倉市六崎大崎台	六崎大崎台遺跡	安行1～3b	1	
15	千葉市花見川区	横橋貝塚	安行3b	1	
16	千葉市若葉区多部田町	多部田貝塚	安行3a	1	
			加曽利B	1	
17	千葉市花見川区宇那谷町	内野第1遺跡	安行1～2	1	
			堀之内2	1	
			加曽利B3～曾谷	2	
			曾谷	1	第1図-5
			安行1	1	
18	千葉市緑区平山町	築地台貝塚	安行2	1	第2図-16
19	野田市清水	野田貝塚	安行3a	2	
			安行3a～3b	1	
20	野田市東金野井	東金野井貝塚	安行3c	1	第1図-10
21	四街道市鹿渡	六通貝塚	加曽利B2	1	
			安行2～3a	2	第2図-13
22	四街道市鹿渡	矢作貝塚	加曽利B2	1	
23	四街道市千代田	八木原貝塚 千代田遺跡	加曽利B2	1	第2図-2
			安行3a	1	
24	印旛郡酒々井町墨	墨古沢遺跡	安行3c	2	
25	我孫子市我孫子	下ヶ戸貝塚	安行2～3b	7	第2図-7
			曾谷	1	
26	市原市国分寺台中央	祇園原貝塚	安行1	3	
			安行3a	1	
			安行3a～3b	1	
			曾谷	1	
27	市原市西広字上ノ原	西広貝塚	安行3a～3b	1	
			安行3b	1	
			安行3c	1	第1図-9
			曾谷	1	
28	成田市玉造	八代玉作遺跡	安行3a	1	
29	袖ヶ浦市上宮田	上宮田台遺跡	加曽利B3	1	
			加曽利B～安行b	1	
30	銚子市余山町	余山貝塚	安行1～3b	1	
			安行3a	3	
31	流山市三輪野山	三輪野山貝塚	安行2～3b	1	
			安行3a～3b	1	
			安行3c	5	第2図-28

	埼玉県				
32	さいたま市大宮区三橋	並木貝塚遺跡	安行3a～3b	1	
33	さいたま市岩槻区城南	真福寺貝塚遺跡	安行3a	1	第2図-17
			安行2～3a	3	
34	さいたま市見沼区小深作	小深作遺跡	安行3a	1	
			安行3a～3b	1	第2図-14
			安行1～2	1	
35	さいたま市見沼区東大宮	東北原遺跡	安行2～3b	1	
			安行3b	4	
36	さいたま市緑区馬場	馬場小室山遺跡	安行3a	3	
			安行3a～3b	1	
37	さいたま市緑区大字大門	南方遺跡	安行3a	2	第2図-18
38	深谷市岡	原ヶ谷戸遺跡	安行3c～3d	1	第1図-8
			曾谷・高井東	1	第1図-4
			安行2～3b	1	
39	桶川市赤堀	後谷遺跡	安行3a～3b	8	第2図-9～12
			安行3b	1	第2図-8・23
			安行3c	2	第2図-26・33
			安行3c～3d	1	第2図-27
40	鴻巣市大字赤城	赤城遺跡	安行3a	1	
			安行3b	1	第2図-15
	深谷市針ヶ谷	大里郡岡部町	安行3c	1	
			安行3a～3b	2	
41	川口市戸塚西台	精進場遺跡	安行3a	1	
			安行3c	1	第2図-25
42	川口市赤芝新田	赤山陣屋跡遺跡	安行3a	1	
			安行3a～3b	1	
43	川口市大字石神	石神貝塚	安行3a	1	
			安行3a～3b	1	
44	川口市大字西立野	宮合貝塚	加曽利B	1	
			安行3a～3b	1	
			安行3b	1	
			堀之内～加曽利B	1	
45	白岡市実ヶ谷	前田遺跡	安行2～3b	1	
			安行3a～3b	1	
			安行3c	1	
46	蓮田市大字黒浜	久台遺跡	安行2～3b	8	
			安行3b	1	
			加曽利B1	1	第2図-1
47	蓮田市大字黒浜字江ヶ崎	雅楽谷遺跡	安行2	3	
			安行3a	1	
			安行3a～3b	14	
48	蓮田市東	ささら遺跡	安行3a	1	
	東京都				
49	大田区田園調布本町	下沼部貝塚	加曽利B	1	
			曾谷式	1	
			安行3a	1	
50	町田市成瀬	なすな原遺跡	加曽利B～曾谷	2	
51	調布市布田	下布田遺跡	安行3c～3d	1	
	神奈川県				
52	横浜市磯子区杉田	杉田遺跡	安行3b	1	第2図-19
53	横浜市都筑区荏田	華蔵台遺跡	安行3b	3	
	群馬県				
54	藤岡市大字中栗須	谷地遺跡	安行3c	2	第2図-34
55	群馬県桐生市川内町	千網谷戸遺跡	安行3a～3b	2	
	山梨県				
56	北杜市大泉町谷戸寺金生	金生遺跡	安行3b	1	第2図-20
	長野県				
57	埴科郡戸倉町	円光房遺跡	安行3b～3c式並行	2	第2図-30・31
	新潟県				
58	三島郡越路町	朝日遺跡	安行3a	1	第2図-21

関東・甲信越地方の角底土器：書誌名一覧

1：茨城県教育財団 2009 上境旭台貝塚、2：奈良国立文化財研究所 1989 福田貝塚資料・平安博物館考古2課 1972 茨城県東村福田貝塚発掘調査概報・渡辺誠 1991 茨城県福田(神明前)貝塚、3：茨城県教育財団 1981 冬木A貝塚・冬木B貝塚、4：思案橋遺跡発掘調査会 1987 茨城県総和町思案橋遺跡、5：土浦市教育委員会 2006 国指定史跡上高津貝塚C地点、6：栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 寺野東遺跡、7：栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997-2001 藤岡神社遺跡、8：千葉県教育振興財団 2016 市川市道免き谷津遺跡確認調査・第1地点、10：佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ・印旛郡市文化財センター 2000 吉見台遺跡A地点・印旛郡市文化財センター 1997 吉見台遺跡B地点、11：印旛郡市文化財センター 2009 宮内井戸作遺、12：佐倉市教育委員会 2004 第5次・第8次・第10・12次・第16次、13：印旛郡市文化財センター 2011 馬場遺跡第5地点(第1次・第2次)、14：佐倉市遺跡調査会 1975 大崎台遺跡、15：千葉県教育委員会 1965 千葉県遺跡調査報告書、16：千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター 2003 多部田貝塚・貝殻塚遺跡・ムグリ遺跡、17：千葉市文化財調査協会 2001 千葉市内野第1遺跡発掘調査報告書、18：千葉市文化財調査協会 2000 千葉市築地台貝塚、19：野田市教育委員会 2007 野田貝塚：第23次発掘調査；清水遺跡：第2次発掘調査・野田市教育委員会 2005 野田貝塚：第20・22次発掘調査；清水遺跡、20：千葉県文化財センター 1994 野田市東金野井貝塚発掘調査報告書、21：千葉県教育振興財団文化財センター 2007 千葉市六通貝塚、22・23：阿部 2004、24：千葉県教育振興財団 2006 酒々井町墨古沢遺跡、25：我孫子市教育委員会 2014 下ヶ戸貝塚、26：市原市文化財センター 1999 千葉県市原市祇園原貝塚、27：上総国分寺台遺跡調査団 1977 西広貝塚・市原市教育委員会 2007 市原市西広貝塚、28：千葉県文化財センター 1975 公津原、29：千葉県教育振興財団文化財センター 2010 袖ヶ浦市上宮田台遺跡、30：杉山壽榮男 1924 原始文様、31：流山市教育委員会 2008 三輪野山貝塚発掘調査概要報告書、32：早川智明・柳田敏司 1963「大宮市並木貝塚」『台地研究』No.13、33：杉山壽榮男 1928『日本原始工芸』、34：大宮市教育委員会社会教育課 1990 小深作遺跡発掘調査報告・大宮市教育委員会 1971 小深作遺跡、35：大宮市遺跡調査会 1985 東北原遺跡発掘調査報告第4・5・6・8次調査、36：浦和市遺跡調査会 1982 馬場(小室山)遺跡・浦和市教育委員会 1983 北宿・馬場北・馬場東・馬場・小室山遺跡発掘調査報告書、37：さいたま市遺跡調査会 2009 棚谷遺跡(第3次)・南方遺跡(第5・6次)・南方西台遺跡(第2次)・行谷遺跡(第3次)・さいたま市遺跡調査会 2005 棚谷遺跡(第15次)・南方遺跡(第9次)、38：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 原ヶ谷戸・滝下、39：桶川市教育委員会 2004 後谷遺跡、40：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988 赤城遺跡：川里工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告、41：川口市教育委員会 1992 精進場遺跡、42：川口市遺跡調査会 2005 赤山陣屋跡遺跡、43：吉田格 1973『関東の石器時代』・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997 石神貝塚・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2000 石神貝塚、44：川口市遺跡調査会 1984 宮合貝塚遺跡・埼玉県川口市遺跡調査会 2011 宮合貝塚遺跡：土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、45：白岡市教育委員会 2014 前田遺跡・白岡町教育委員会 1998 前田遺跡、46：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2007 久台遺跡、47：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990 蓮田市雅楽谷遺跡・埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2005 雅楽谷遺跡、48：蓮田市遺跡調査会 1995 ささら遺跡、49：大田区史さん委員会 1974 大田区史、50：なすな原近隣遺跡調査会 1984 なすな原遺跡-No.1 地区調査、51：國學院大學研究開発推進機構学術資料センター 2016 東京都調布市史跡下布田遺跡、52：杉原莊介・戸沢充則 1963「神奈川県杉田および桂台遺跡の研究」『考古学刊』2の1、53：横浜市教育委員会 2008 華蔵台遺跡、54：藤岡市教育委員会 1988 C7神明北遺跡・C8谷地遺跡、55：山梨県埋蔵文化財センター 1988 金生遺跡、56：戸倉町教育委員会 1990 円光房遺跡、57：越路町教育委員会 1965 朝日遺跡調査報告書